

タイトル 「イエスは主である」
聖書箇所 コリント I 12章3節

【新改訳 2017】

1Co 12:3 ですから、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも「イエスは、のろわれよ」と言うことはなく、また、聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。

I コリント 12 章 3 節の後半の「イエスは主」ということばは、ロマ書 10 章 9 節にも使われています。

ロマ 10:9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われるからです。

10:10 人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。

ロマ書の「イエスを主」は、「イエスは主です」ということと同じ意味です。

今朝は、「イエスは主です」の意味を考えてみたいと思います。ロマ書では、人のたましいが罪から解放される、救いの文脈で記されています。人の魂が救われることはとても大切なことです。そこには大きな喜びがあります。救い主への感謝がふつふつと溢れ出ます。ですから、初代教会の人々は、「イエスは主です」と歌うこと、お祈りの中で、「イエス様、あなたは、わたしの主です」と感謝の心で、唱えることは、当たり前のことであったことは、すぐに想像することができます。

(^^♪ F イエスは主 イエスは主
死からよみがえられた主
すべてのものは 膝をかがめて
あがめん イエスは主と

今私達は、(^_^♪「イエスは主」という賛美を聖霊に導かれて歌いました。皆さんは、「イエスは主」と歌いながらどのような想いを抱かれたのでしょうか。

初めに、「イエスは主です」と告白する内容は、どのようなものなのか。それを考えてみたいと思います。「イエス様が主ですから」、すぐにわかるのは、「自分が人生の主人ではない」ということです。自分というものをしっかり持っている人もいれば、自分が何者であるかを知らないで自分探しをしている人もいます。

まず、「自分というものをしっかり持っている人」と、自覚している人へのメッセージです。自分をしっかりと持つことは、大切なことです。しかし、何かのきっかけで自分の言動を抑えられなくなると大変な事態を招くこととなります。そうならないため、いつも自分を外から客観的に見つめ直すにはどうしたらいいのでしょうか。それは、自分を見つめ直すみことばがあるかないかです。私の場合は、イザヤ書 55 章 9 節のみことばで、自分の人生、また、自分の職務を見つめ直すことです。

イザヤ

55:9 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。

このみことばは、わたしの道が一番だ、わたしの「思い」ヘブル語では、「マハアシャーバー」¹と言って、企て、目論見、目的、計画・・・等を意味することばです、ですので、わたしの道が絶対に正しいとか、わたしの計画が絶対に良いとか、人間は誰も言うことができないことをこのみことばは教えています。このように、イザヤ書 55 章 9 節のみことばは、人間の心の高慢を鎮静する迫力があります。ただ迫力があるだけではありません。続く、10 節と 11 節を読むと、みことばに対する信仰が満ち溢れ出します。

55:10 雨や雪は、天から降って、もとに戻らず、地を潤して物を生えさせ、芽を出させて、種蒔く人に種を与え、食べる人にパンを与える。

55:11 そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、わたしのところに、空しく帰って来ることはない。それは、わたしが望むことを成し遂げ、わたしが言い送ったことを成功させる。

このみことばは、神の御心を聴いた人々が、そのみことばに従って生きるならば、必ず、その喜

びの実を結ぶ、ということ描ききっています。「潤す」、「種をまく」、「芽が出る」「成し遂げる」、「成功する」という生き生きしたポジティブなことばであふれています。わたたちの主であるイエス様は、福音書の中で、みことば信仰について語っています。

ルカ福音書 7章6節から10節をお読みします。「ただ、おことばを下さい。」ということば、また、「イスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません。」ということばがある有名な箇所です。

ルカ福音書

7:6 そこで、イエスは彼らと一緒に行かれた。ところが、百人隊長の家からあまり遠くないところまで来たとき、百人隊長は友人たちを使いに出して、イエスにこう伝えた。「主よ、わざわざ、ご足労くださるには及びません。あなた様を、私のような者の家の屋根の下にお入れする資格はありませんので。

7:7 ですから、私自身があなた様のもとに伺うのも、ふさわしいとは思いませんでした。ただ、おことばを下さい。そうして私のしもべを癒やしてください。

7:8 と申しますのは、私も権威の下に置かれている者だからです。私自身の下にも兵士たちがいて、その一人に『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをしろ』と言えば、そのようにします。』

7:9 イエスはこれを聞いて驚き、振り向いて、ついて来ていた群衆に言われた。「あなたがたに言いますが、わたしはイスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません。」

7:10 使いに送られた人たちが家に戻ると、そのしもべは良くなっていた。

この百人隊長は、自分を律することのできる、聡明な勇者でした。「自分というものをしっかり持っている人」と言えます。彼が、神からの祝福を得た理由が二つここには、書かれています。第1は、弱っている人の辛さ、－しもべの病気の痛み－を察知する優しい心の持ち主であったことです。第2は、「私のような者」、この語り口に込められたいるように、謙遜な心の持ち主であったことです。使徒パウロは、ピリピ書4章8節でこのように書いています。

ピリ 4:8 最後に、兄弟たち。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて評判の良いことに、また、何か徳とされることや称賛に値することがあれば、そのようなことに心を留めなさい。

使徒パウロは、生まれながらに、ローマの市民権を持ったユダヤ人でした。もしかすると、優しい心を持ち、謙遜で、人望の厚いローマの百人隊長の姿を子ども頃に見て、何か憧れを抱いたのかもかもしれません。「自分というものをしっかり持っている人」にも、高慢の誘惑はやってきます。日本のことわざには、「実るほど首を垂れる稲穂かな」がありますが、イザヤ書 55 章 9 節、「天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」を暗唱していただければ幸いです。

さて、次に、「自分というものをしっかり持っている人」と自覚できない人へのメッセージです。「自分探しの旅をしている人」のことを考えてみましょう。この人は、危険な状態にあると言えます。人生をゆだねる信頼すべき絶対的なものを持っていないからです。「イエスを主」としないならば、何か別のものの支配に身をゆだねなければなりません。新約聖書には、神の御心でない人間が誘惑される欲望のリストが記されています。ヨハネの手紙第 1、2 章 16 節です。

I ヨハ 2:16 すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。

続けて、次の節、17 節を読みます。

I ヨハ 2:17 世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。

ヨハネの手紙が書かれた頃、「聖霊によらない人間的な知恵による救い」の教えが広まり始めました。どのようにすれば、「聖霊様の働きによる“イエスは主”の救いの喜びに満ちた告白」を取り戻すことができるのでしょうか。そのシンプルな答えが、少し前の 5 節と 6 節にあります。

I ヨハ

2:5 しかし、だれでも神のことばを守っているなら、その人のうちには神の愛が確かに全うされているのです。それによって、自分が神のうちにいることが分かります。

2:6 神のうちにとどまっていると言う人は、自分もイエスが歩まれたように歩まなければなりません。

シンプルに、「イエスが歩まれたように歩む」この実践あるのみです。ヨハネの手紙第1の2章6節、「神のうちにとどまっていると言う人は、自分もイエスが歩まれたように歩まなければなりません。」このみことばも暗唱して頂ければ幸いです。

東京は、まだまだ、感染拡大が収まらない状況です。日々、「イエス様を主と仰ぎつつ、イエス様のように歩いてまいりましょう。」

(^^♪ F イエスのごとく イエスのごとく 我が願い イエスのごとく
わが想い へりくだり 十字架の姿に
わが歩み 日々 きよめん 栄の姿に

お祈りします。

i מְשֻׁבָּה